

高等女学校の音楽科教育  
—教科書、授業実践を中心とした発展の過程—

越山 沙千子（東京藝術大学大学院）

高等女学校は、明治期から昭和 22（1947）年の学制改革まで存在した女子の中等教育機関である。本研究は、水野真知子による女子教育改革史の、7 期から成る時代区分を抛りどころとしながら、高等女学校の音楽科教育の発展過程を明らかにし、中等音楽科教育史における意義と課題を指摘することを目的とする。

本論文は、序章、第 1 部「女子の最高学府としての高等女学校」（第 1～3 章）、第 2 部「高等女学校音楽科教育の実際」（第 4～5 章）、終章で構成される。第 1 部では良妻賢母思想、制度、高等女学校音楽科の位置づけの変遷から、高等女学校の音楽科教育を検討するための視点を得た。すなわち、高等女学校は中流の女子に向けた階層教育であった点、男女別学が実施されていた点、これらが戦後の教育で廃止され、大衆化、平準化がなされるという点、大正期から昭和期に音楽科教育で発展が見られるという点、家庭教育と教養教育という 2 つの側面をもつという点、生徒が卒業後に学びを更新することが求められていたという点である。

第 2 部ではそれらを踏まえて、教科書及び授業実践について検討した。第 4 章では、検定制が導入された明治 28（1895）年から昭和 21 年（1946）年の高等女学校用検定済教科書、昭和 22（1947）年の旧制中等学校及び新制中学校用文部省著作教科書、新制高等学校用の検定済教科書、計 37 種 125 冊を対象に、構成、教材の歌詞タイトル、曲の分析を行った。また、第 5 章では雑誌に掲載された当時の先駆的な授業実践、及び明治期に開校した東京の公立高等女学校 4 校の授業実践を取り上げ、内容や方法の改良の様相を明らかにした。

発表では、教科書の用途や構成、歌詞内容、音楽の特徴の変遷、授業実践を中心に取り上げ、終章でまとめた本研究の結論と課題について述べる。